

—みる きくかたる—

三島市郷土資料館

女大学宝箱



三島のおせん

北条政子木像 (安養院蔵)

三島高女 (大正期の体操服)

三島と女性 — 歴史の中の女性たち —

平成十九年三月十八日(日)

〜五月二十七日(日)

ごあいさつ

戦後、女性が初めて参政権を行使してから60年が経過しました。この間、高度経済成長期を挟んで社会情勢の目まぐるしい変化とともに、女性を取り巻く環境にも大きな変化が見られました。

本企画展では、原始古代から現代までの三島に関わる様々な女性や関連資料を取り上げながら女性の歴史を振り返ると同時に、この企画展を通じてこれからの男女共同参画社会を推進するための一助となれば幸いです。

会場 三島市郷土資料館1階展示室

開館時間 9:00~16:30
9:00~17:00 (4/1から)

休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)

入館料 無料(ただし楽寿園入園は有料)

原始古代



三島市から出土した土偶
(奥山遺跡、千枚原遺跡)

土偶に見る女性信仰

縄文時代の人々は狩猟・採集中心の生活だったため、天候や地震、噴火などの自然現象に左右されてきました。それゆえ人々は土偶と呼ばれる土製人形を精霊に見立て、祈りを捧げました。全国から発掘される土偶は、ほとんどが女性を模したもので、髪型や乳房、腰などの女性的な特徴が誇張されています。また、一部が欠損して発見される例も多いよう

です。こうした点から豊饒や子孫繁栄を祈るためであるとか、人の災厄の身代わりではないかといわれています。

三島市で出土した土偶にも、髪型から女性らしいこと、顔の部分しか無いこと、また強調された眉毛や入れ墨など、その特徴が表れています。

女王卑弥呼

古代日本国家の様子は中国の史書『三国志』の中にある通称「魏志倭人伝」に見ることができます。その中で「邪馬台国はもともと男王であったが、数十年の戦乱が続き、ようやく卑弥呼という女王を立ててから治まった。女王は独身で人前に姿をあらわさず、呪いを行い人心を惹きつけるが、政務は男の弟が補佐していた。女王は魏に使節を派遣して親魏倭王の称号を得た。卑弥呼の死後、再び男王になると大乱が起き、女王を立てて治まった」とあります。



『魏志倭人伝』卑弥呼の部分
(岩波文庫『魏志倭人伝』より)

日本最初の女性天皇

日本では過去に8人10代の女性天皇が存在しました(2代は※重祚)。そのうちの6人8代は6世紀末から8世紀後半に集中しています。その中でも592年に即位した日本最初の女帝といわれる推古天皇は、推古元年(593)、甥・聖徳太子と叔父・蘇我馬子を近臣とし、遣隋使を派遣したり、官人の心構えである憲法十七条、個人を対象とした位階制である冠位十二階を定めるなど、様々な改革を行いました。※重祚=一度退位した皇帝が再び皇帝の座につくこと



『日本書紀』推古紀

中世

阿仏尼と北条政子

中世になると貴族の支配から武士の支配へと移行する中で、鎌倉幕府を開いた源頼朝の正妻である北条政子(1157-1225)は、伊豆国の流人となっていた頼朝と契りを結びますが、生家の姓を持ち続け、頼朝の死後も鎌倉幕府を守り通しました。承久の乱の際、政子は並みいる武将を前に大演説を行い、御家人たちを奮い立たせたというのには有名なエピソードです。

夫の頼朝を助け、その死後は幕府の中心にあって「尼將軍」と呼ばれた北条政子は、中世での理想の正妻といわれています。

一方、『十六夜日記』の作者として知られる阿仏尼(1222?-1283)は、実子と継子との所領争いを鎌倉幕府へ直訴し解決するために京都から鎌倉へ旅立ちます。その鎌倉までの16日間の日記が『十六夜日記』です。途中、三嶋明神に立ち寄った阿仏尼は「あはれとやみしまの神の宮柱唯こゝにしもめぐりきにけり」と歌を詠んでいます。また阿仏尼は『乳母のおしえ』という女訓書を著したとも言われており、これには貴族の子女を育てる心得が記されています。



北条政子木像
(鎌倉・安養院蔵)



阿仏尼像

(「日本の美術No.384」(至文堂)より)

コラム

～70頁「日本史」に見る中世の女性像～

ルイス・フロイスは1563年にイエズス会の宣教師として来日し、以後34年間日本でのキリスト教の布教活動に従事しました。その間には織田信長の寵愛を受けながら、ヨーロッパと日本を多方面から比較した詳細な記録『日本史』を執筆しました。その中には日本の女性とヨーロッパの女性の比較も克明に描かれていますので、以下にその一部を紹介します。

- ◇ヨーロッパでは、夫婦間において財産は共有である。日本では、各々が自分の分け前を所有しており、時には妻が夫に高利で貸し付ける。
- ◇ヨーロッパでは、墮落した本性にもとづいて、男たちの方が妻を離別する。日本では、しばしば妻たちの方が夫を離別する。
- ◇ヨーロッパでは、妻は夫の許可なしに家から外出しない。日本の女性は夫に知らさず、自由に行きたいところに行く。
- ◇ヨーロッパでは、通常、女性が食事を作る。日本では、それを男性が作る。そして貴人は、料理を作るために厨房に行くことを立派なこととみなしている。
- ◇ヨーロッパでは、女性が葡萄酒を飲むなどは非礼なこととされる。日本では、女性の飲酒は非常に頻繁であり、祭礼においてはたびたび酩酊するまで飲む。

『フロイスの日本覚書』中公新書(1983年)より

近世

おんなだいがく

『女大学』～三従七去の教え～



江戸時代になると徳川幕府の封建制が確立し、社会を構成する基本単位は「家」となります。個人より家の維持・発展・継続が重要視される中で、武士の配偶者である妻の最大の義務は家を継ぐ男子を産むことであり、更に家長である夫のために働

くことを教育されます。貝原益軒(1630～1714)が著したといわれる『女大学宝箱』(1716)という書物は、女性のための倫理道徳教科書として江戸時代から明治にかけて一大ベストセラーとなりました。その内容は、19ヶ条から成り、女子教育の必要性和婚家

三従の教え (従う対象)	七去 (妻を離婚できる理由)
①家にあっては父	①夫の両親に従順でない
②嫁しては夫	②子がない
③夫の死後は子	③男女関係にみだら
	④嫉妬深い
	⑤悪い病気がある
	⑥おしゃべり
	⑦物を盗む

での心得について論じています。特に儒教の教えでもある「三従七去」は後の時代まで影響を与え続けました。

みくだりほん

三行半～離縁状・離別状・去状～

江戸時代、妻が直接的に離縁を申し出ることが原則として出来ず、夫の離縁状、通称「三行半」によって離婚が成立とされていました。妻の側から離縁(離婚)



去状之事 (天保14年)

するには、縁切寺(満徳寺、東慶寺)に駆け込み、その理由を聞いてもらい夫に離縁状を出すように請求するか、3年間を寺で修行すれば離婚が成立するといった具合でした。

三行半というのは、文字通り離縁状が3行半で書かれる事が多いことから付いた呼称です。その内容は場合によって違いますが、一般的には離縁する旨、離縁の理由、再婚の許可を簡潔に記してあります。

じよろうしゅう

三島女郎衆

民謡にも唄われ全国に名を知られた「三島女郎衆」ですが、江戸時代、三島宿の約80%の旅籠が飯盛旅籠といわれ、宿場女郎などと呼ばれる食売女が雇われていました。三島女郎衆の始まりは、1590年(天正18)3月、豊臣秀吉が小田原攻めの際、将士の休養のため三島に女性を集めた頃からといわれています。三島の宿場女郎には安房(千葉県)と相模(神奈川県)出生の女性が比較的多かったようです。

徳川幕府は、宿場に客相手の「宿場女郎」を置くことを何度も禁止しましたが、宿場側では女郎衆によって繁栄するので、一向に減らなかったといわれています。このため、ついに1718年(享保3)、旅籠1軒につき2人までの飯売女を置くことを認めています。三島宿の多くの旅籠はこの定員を守らず、5人置く旅籠も多かったようです。

江戸時代を通じて多くの旅客によって賑わった三島宿ですが、1889年(明治22)に東海道線が開通すると、箱根越えの旅人は激減し、三島宿は寂れ、旅籠も女郎衆も商売替えを余儀なくされました。

コラム

～三島のおせん～

お正月映画の定番だったフーテンの寅さんの口上に「三島のおせん」が出てくるのをご存知でしょうか。「サンで死んだが三島のおせん、おせんばかりが女子じゃないよ…」という伝統的な香具師(祭りで品物売る人)の口上です。この「三島のおせん」は江戸時代末の浮世絵に描かれています。

江戸時代末に出版された浮世絵の一つに「役者見立東海道五十三駅」シリーズがあり、役者絵に多くの作品を残した三代歌川豊国が描いています。この中の「三島おせん」の図は1852年(嘉永5)の出版で、中央に女形五代目瀬川菊之丞演ずる「おせん」が大きく描かれています。江戸期に発行された浄瑠璃本「恋傳授文武陣立」の中にある「五ツ目、三嶋のお仙段」によれば、この物語は鎌倉時代に設定され、北条時政に滅ぼされた伊藤祐清の子庄六(病持ち)と許嫁のお仙が母と共に三島の宿外れに暮らす家に、仇の北条時政が宿泊、主家の恨みを晴らそうとするお仙は逆に時政の計略にはまり自害します。病が回復した庄六は北条の追討を誓う、というものです。美女の仇討ちの悲劇は人気の演目だったらしく、歌舞伎にも採りあげられ、明治初年まで江戸・大阪・名古屋などで何回も上演された記録が残ることから、この「おせん」の物語が評判を呼び、役者絵に描かれたり、口上に使われたと思われます。

明治以降は、「お仙の段」の上演も少なくなり、忘れ去られてしまいました。

(参考『三島のおせんについて』望月宏充、伊豆史談126号)



(関守敏氏蔵)

役者見立 東海道五十三次之内
「三島おせん」(三代豊国)

東海道 三島 御上洛東海道
三代豊国 1868(文久3)
三島女郎衆の化粧姿(部分)



近代

浜松県公選民会小区議長議員選挙投票

右の写真は1876年(明治9)の浜松県民会選挙の投票用紙を綴ったものです。記名投票で行われ、投票者に女性の名前が散見します。「浜松県民会設立方法」には戸主を選挙人として規定されていますので、女性戸主に投票権があったのはこのためです。家の代表者・戸主による選挙であって、男女同権思想に基づく選挙と位置づけることは難しいとされていますが、この当時において、戸主による選挙とはいえ女性も投票を行っていたという事実は、全国的に見ても注目に値します。



民会選挙投票用紙綴
(静岡県立中央図書館蔵)

「元始女性は太陽であった」～『青鞆』と女性解放～

平塚らいてう(1886-1971)を中心に、女性だけの手によって生まれた雑誌『青鞆』は、1911年(明治44)創刊されました。「元始女性は…」という創刊の辞はあまりにも有名で、その表紙絵は後に高村光太郎と結婚する長沼智恵子が描いたものです。同誌は当時の家父長制度や良妻賢母主義から女性を解放するという思想のもとに、1916年(大正5)2月まで発行され続けました。誌名は鳥取出身の評論家・生田長江の命名で、当時のヨーロッパで知的な女性達が履いていた靴下が青かったことから”Blue stocking”と呼ばれたことに由来します。また、三島出身で後に婦人参政権実現にも関わった高田(坂本)真琴(1898-1954)も『青鞆』の創刊辞に感銘を受け、その発行に携わりました。



『青鞆』(復刻版・龍溪書舎)の表紙
(静岡県立中央図書館蔵)

『青鞆』は1913年(大正2)4月に、文部省の提唱する良妻賢母の理念にそぐわないとの理由により発禁処分を受けましたが、あらゆる婦人問題を論議の対象とした青鞆の活動は雑誌や新聞で論じられるようになります。この活動を契機として、日本初の婦人団体「新婦人協会」が設立され、「婦人参政権獲得期成同盟会」に引き継がれ、やがて戦後の婦人参政権の実現へと繋がっていくことになります。



万寿楼(大正期)

三島遊郭

三島宿の飯盛旅籠は、明治になると貸座敷と変わり、大中島・小中島付近に20数軒あったといわれています。1925年(大正14)茅町(現・清住町)に万寿楼・稲妻楼・尾張楼・新喜楼・井桁楼の5楼が移転し、三島新地、即ち三島遊廓を設置しました。

しかし1956年(昭和31)の売春防止法成立により近世以来の公娼制度は終幕を告げ、同時にこれら遊廓もその歴史を閉じることとなりました。

間宮はま～質素勤勉な社会事業家～

1839年(天保10)賀茂郡八幡野村(現・伊東市八幡野)に生まれ、19歳で三島の間宮利三郎と結婚し、横浜に出て夫婦で貿易雑貨業を営みますが、夫が病没してからは三島市中島に呉服店を開き、間宮家を再興しました。その後、廃業してからは様々な社会事業に乗り出し、女性の地位向上などに尽力します。1920年(大正9)、臨終の床でキリスト教の洗礼を受け、83歳で亡くなりました。

功績としては、伊豆禁酒会を結成し、禁酒運動を開始しますが、この活動は遠くアメリカまで聞こえたといえます。また、火葬設備のなかった三島に、有志の賛同を得て火葬場を作り、町に寄付しました。このほか女子学生を自宅に寄寓させたり、キリスト教の婦人団体活動である矯風会活動にも情熱を注ぎました。更に廃娼運動の中心人物を独力で招き、自らも演壇に立って啓蒙活動を行いました。



間宮はま
(写真提供: あざれあ)

コラム

～モダンガールと三四呂人形～

ダンスホール、カフェ、デパート…大正末期から昭和初期に花開いたモダン都市文化。女性の社会進出が急速に推し進められたこの時代、バスガールやデパートガールなど「職業婦人」と呼ばれる女性も増えていきました。また、欧米の風俗や文化に魅せられたモダンボーイ(モボ)やモダンガール(モガ)と呼ばれる若者が登場し、女性は断髪に洋装というファッションが流行の最先端となりました。

三島出身の人形作家・野口三四郎の三四呂人形にも、この時代のファッションを反映した人形を見ることができます。



メリーさん(個人蔵)



パラソル(個人蔵)

銃後のつとめ ～戦時中の女性～

1938年(昭和13)国家総動員法が公布されると、女性たちは*銃後の守りと称して隣組や国防婦人会への参加が義務づけられました。1942年(昭和17)、愛国婦人会、大日本国防婦人会、大日本連合婦人会などが統合して大日本婦人会が発足し、20歳未満の未婚者を除く全婦人が加入させられ、貯蓄増強・廃品回収・国防訓練・兵士の送迎や慰問・遺族の援護など、銃後活動の国家奉仕に動員されています。



学徒動員された三島高女の女学生(1944年)

※銃後=戦場の後方の意味で、直接戦闘に加わらない一般国民のこと

また三島の中等学校の生徒達は、戦時色が強まる1941年(昭和16)頃から「銃後の学生」として、軍事教練・防空訓練・慰問・勤労奉仕の時間が多くなっていきました。労働力不足から、三島高女(現・三島北高)の上級生は中島飛行機・森永食品・海軍工廠(沼津市など)へ動員され「神風」と書いた鉢巻をしめ、旋盤や運搬等の仕事に従事しています。また、三島女子商(現・三島高校)の2年生以上は中島飛行機・大東工業・国産電機で部品製造に従事しました。



国民服の茶町国防婦人会



『銃後のつとめ』
『銃後の護お話集』

はちまき せんぼん

現代

三種の神器 ～「洗多苦」から電気洗濯機へ～



三種の神器といわれた電化製品など

三種の神器とは、戦後の家庭における3種類の耐久消費財(白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫)を指します。歴代天皇に伝えられた宝物である三種の神器になぞらえて表現されました。テレビが登場する以前は電気釜ある

いは電気掃除機が代わりに入っています。大学卒の初任給が1万円程度の時代に電気洗濯機は2~3万円、テレビは20~25万円ですから、これらは憧れの高価な商品でした。各家電品メーカーは「女性を解放する」「洗濯しながら本が読める」といったキャッチフレーズ入りの広告を作成し、主婦層の購買欲を煽った結果、家電品の普及率は短期間で飛躍的な伸びを見せます。特に電気洗濯機の登場は、それまで「洗多苦」といわれた洗濯板で洗濯物を擦る方法を根底から覆し、同時に主婦の手から皸を軽減しました。

このように家電品の登場は、主婦を家事の重労働から開放したという点で画期的なものであり、更には、それまでの家事労働に対する女性たちの意識を変えていく大きな契機となりました。

三島市婦人連盟とコンビナート反対運動

終戦後、愛国婦人会や国防婦人会が解散し、「婦人が婦人の手で婦人のために新しい自覚した婦人運動を組織する事の必要性がある」という渡辺光子(初代理事長)の投げかけにより、1948年(昭和23)三島市婦人連盟が発会しました。

特筆すべきは1964年(昭和39)の東駿河湾地区石油コンビナート建設反対運動です。三木貞子理事長を中心とする三島市の婦人連盟は、国や静岡県への陳情、公害先進地の視察などを行い、町内会長連合会と共に反対運動を盛り上げていきました。その結果、コンビナートの進出は中止となりました。その後は1972年(昭和47)に開館した「働く婦人の家」などを拠点に、女性の地位向上や生活改善、環境問題などに取り組んできました。

「三種の神器」普及率比較(%)

	白黒テレビ	電気洗濯機	電気冷蔵庫
昭和32年	7.8	20.2	2.8
昭和40年	95.0	78.1	68.7

コラム

～婦人参政権行使25周年記念切手～

1971年(昭和46)婦人参政権25周年を記念して郵政省から記念切手が発行されました。

日本で普通選挙が行われたのは、1928年(昭和3)。しかし、フランス革命当時の欧米と同じように、参政権が付与されたのは男性のみでした。ようやく戦後になって1945年(昭和20)12月17日改正衆議院議員選挙法公布により女性の国政参加が認められます。そして1946年(昭和21)4月10日の戦後初の衆議院選挙の結果、日本初の女性議員39名が誕生しました。

余談ですが、実はこの切手には図案の間違いがあり、それを横浜の小学校6年生が指摘するというエピソードがありました。ちなみに図案の間違いは、国会議事堂中央部分の柱と柱のスキマ数ですが、皆さんはお分かりでしょうか?



婦人参政権行使25周年記念切手



国会議事堂(正面)



昭和39年コンビナート反対運動市役所前でのデモの様子。割烹着を着た女性の姿も多数見える

女性史年表

性史年表

女性史之巻



縄文時代
女性をかたどった土偶を信仰に使用する



古墳時代の豪族の服装

239年 邪馬台国
女王卑呼、魏に使者を遣る

592年 (崇峻5)
日本最初の女帝推古天皇が即位

鎌倉時代
北条政子は妻・母・尼将軍として活躍する

1277年(建治3)
10月28日
阿仏尼が京都から鎌倉への途中で三嶋明神参詣



鎌倉時代の上流婦人の服装

このころ
『枕草子』(清少納言)
『源氏物語』(紫式部)書かれる



平安時代的女房装束



奈良時代の武官の服装



室町時代の上流婦人の小袖姿

室町時代の女性は、自らの財産と機能を持ち社会でそれなりに独自の立場を保持しつつ活動



桃山時代から江戸時代初期の服装

1590年(天正18)
豊臣秀吉が小田原北条攻めに際し、将士の休養のために女たちを集める。三島女郎衆の始まり

江戸時代は封建制が確立し、男尊女卑の傾向が強まる



江戸時代中期頃の庶民の服装

1872年(明治5)
学制公布(男女平等の義務教育実施)人身売買禁止の布告(芸娼妓開放令)

1871年(明治4)
津田梅子ら5人の少女、最初の女子留学生として米国へ

1869年(明治2)
関所廃止により女性の通行が自由になる

江戸時代末期の庶民の服装



1861年(文久元)
皇女和宮が14代将軍徳川家茂へ降嫁する

1716年(享保元)
『女大学宝箱』(貝原益軒)が刊行される

1876年(明治9)
浜松県公選民会小区議長議員選挙、投票用紙に女性の名前

1884年(明治17)
最初の婦人雑誌『女学新誌』創刊

1888年(明治21)
バラ女学校開校

1890年(明治23)
1月7日
三島町で廃娼演説会。弁士に巖本善治。聴衆300余人

1892年(明治25)
バラ女学校開校

1900年(明治33)
10月20日
三島町の娼妓2名、自由廃業を警察署に申し出る



明治44年から大正11年制服

1910年(明治43)
高等女学校令改正。実科高等女学校設置

1901年(明治34)
愛国婦人会設立

1901年(明治34)
与謝野晶子『みだれ髪』発表

1901年(明治34)
5月1日
田方郡立三島高等女学校開校



明治34年から明治43年制服

1911年(明治44)
平塚らいてうら『青鞜』発行

1912年(明治45)
12月13日
女子教員増加、尋常科全教員の25%を占める

1916年(大正5)
『婦人公論』創刊






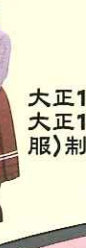

1918年(大正7)
三島家政女学校開校

1919年(大正8)
4月19日
三島高女4年生、校長排斥と母校改革を要求、同盟休校(ストライキ)

1920年(大正9)
梨本宮方子(李方子)が朝鮮王朝の皇太子・李垠殿下と結婚

★★★ この女性史年表絵巻では、古墳時代から江戸時代末期の服装の変遷と、静岡県立三島北高等学校の制服の移り変わりをご覧になることができます★★★

そして
歴史は続く…

<p>1999年(平成11) 男女共同参画社会 基本法公布・施行</p>	<p>2000年(平成12) 2000円札に「源氏 物語絵巻」の絵柄 を採用</p>	 <p>2004年(平成16) 三島北高校男女 共学となる</p> <p>平成16年からの制服</p>	<p>2004年(平成16) 日本銀行券として 樋口一葉の肖像が 女性初。五千円札 の絵柄に起用</p>		
<p>1993年(平成5) 土井たか子氏 日本初の女性衆 議院議長</p>	<p>1986年(昭和61) 男女雇用機会均等法 施行</p>	<p>1979年(昭和54) 国連総会で女性差 別撤廃条約採択</p>	<p>1977年(昭和52) 1月1日 三島市玉沢に母子 休養ホーム調養荘 開設</p>	<p>1975年(昭和50) 三島市議会議長に 山田綾子氏。県下 初の女性議長</p>	
<p>1960年 (昭和35) 婦人青少年 会館 建設</p>	<p>1964年(昭和39) 1月25日 石油コンビナート対策 三島市民協議会の発足 に際し、三島市婦人連盟 は代表を送る</p>	<p>1966年 (昭和41) 三島市佐野 母子寮開設</p>	<p>1970年 (昭和45) 日本初のウー マンリブ大会</p>	<p>1972年(昭和47) 3月30日 「三島市立働く婦 人の家」が竣工</p>	<p>1973年(昭和48) トイレットペー パー、洗剤の「モノ不 足」「買いだめ」パ ニック</p>
<p>1957年(昭和32) 4月1日 駿豆家政学校設置</p>	<p>1956年(昭和31) 売春防止法成立 三島遊郭閉鎖</p>	 <p>昭和25年から 平成15年制服</p>	<p>1949年 (昭和24) 静岡県立三島北 高等学校に改称</p>	<p>1948年(昭和23) 母子手帳配布開始</p>	<p>1948年(昭和23)1月 三島市婦人連盟発会 会員100名余り</p>
 <p>昭和18年から 昭和20年制服 (戦中・戦後)</p>	<p>1944年(昭和19)3月 三島高女、学徒勤労働員 が通年実施となる。中島 飛行機三島製作所・森永 食品・森永乳業に配属</p>	 <p>昭和21年から 昭和24年制服 (終戦直後)</p>	<p>1946年(昭和21) 婦人参政権行使。女性 国会議員の誕生</p>	<p>1947年 (昭和22)3月 横浜洋裁学院 三島校建設</p>	
<p>1942年 (昭和17) 妊産婦手帳 規程実施</p>	<p>1941年(昭和16)12月 戦時色が強まり愛国婦人 会など各団体が防空訓練 等の銃後の守りに協力し ていく</p>	<p>1940年 (昭和15) 物資の購入が 切符制となる</p>	<p>1939年 (昭和14) 女子の常服を モンペとする</p>	 <p>昭和10年から 昭和19年制服</p>	
 <p>大正10年から 大正11年(夏 服)制服</p>	<p>1922年(大正11) 3月23日 静岡県下の高等女 学校一斉に県立へ 移行(静岡県立三島 高等女学校)</p>	 <p>大正13年から 昭和9年制服</p>	<p>1930年(昭和5) ドレスメーカー 三島洋裁女学院 三島実科女学校 開校</p>	<p>1931年(昭和6) 三島第一文化服 装学院が洋裁塾 として発足</p>	<p>1934年(昭和9) 3月31日 三島実科女学校 創立(家政・実 践両女学校統 合、現三島高)</p>

三島の女学校

バラ女学校

造り酒屋を営む旧家に生まれた花島兵右衛門^{はなじまひょうえもん}は、キリスト教と出会い大きな影響を受けました。1886年(明治19)、三島教会(現・日本基督教団三島教会)で一家7人洗礼を受け、その後、信仰上の理由から家業の造り酒屋を廃業し、酪農経営を始めます。また同時に女子教育の必要性を痛感し、学校の設立を決意しました。そして1888年(明治21)6月、自宅の酒蔵を改造し、現在の三島市役所北側に薔花女学校(通称・バラ女学校)を開校しました。

兵右衛門が校主となり、三島で初めてキリスト教(プロテスタント)を布教した宣教師ジェームズ・バラ博士の従妹にあたるリゼー・バラ女史を校長に迎え、幹事には三島で最初の受洗者小出市兵衛、更には日本人教師数名のほか、多くのアメリカ婦人の応援がありました。

県下初のキリスト教主義女学校であり、学科も国語、漢文のほかはすべて英語で行われ、特に英語の進んだ学校として有名でした。50人ほどの生徒が学び、夜間には男子青年のためのクラスが設けられ50人ほどが学びました。

しかし社会情勢は国家主義的体制が敷かれ始め、キリスト教は国家体制と相容れないものとなり、校長らの努力も虚しく、わずか4年で閉校となってしまいました。



リゼーバラ女史

こいでいちべう



バラ女学校開校式(明治21年)

三島家政女学校

1918年(大正7)宮倉町(現・大社町)成真寺住職土屋智重が三島家政女塾を開き、高等女学校卒業者に高度の裁縫技術と女子教育を始めました。1921年(大正10)正式な学校の認可をとり、三島家政女学校と名付け、予科・本科・研究科を設けました。生徒数は年を追って増加し、1928年(昭和3)には文部大臣許可を受け、共立三島家政女学校に発展しました。

しかし、1930年(昭和5)、家事・裁縫を教えることに重点を置いた3年制の三島実践女学校が創立し、三島地区に女子の職業学校が2校存在することとなったため、1934年(昭和9)両校は合併しました。当時は実業学校より高等女学校を望む声が高かったこともあり、4年制の三島実科高等女学校が設立されました。その後、1955年(昭和30)商業科を設置し、男女共学となった現在の三島高等学校の創立起点となりました。



三島実科高等女学校
二日町時代の正門と校舎

三島高等女学校

明治から現在まで三島・田方地区の女子教育の中心的役割を果たしてきた同校は、1901年(明治34)に開校しました。現在までに校名が4回変わり、所在地も4カ所の変遷があります。

開校時は現在の楽寿園にあたる小松宮別邸養蚕室^{こまつのみや ようさん}を借り、静岡県田方郡立三島高等女学校として始まりました。伊豆一円から優秀な子女が集まり、良妻賢母を育てることを目的とし、90人の生徒が集まりました。



田方郡立三島高等女学校

1922年(大正11)郡制廃止に伴い静岡県立三島高等女学校となり、三嶋大社東隣りの戦捷記念館^{せんししょう}に1年間仮住まいをし、1924年(大正13)には宮町(現・大宮町)に新校舎ができました。

1948年(昭和23)学制改革により三島第一高等学校と改称、同年定時制夜間課程を開設しましたが、翌年には静岡県立三島北高等学校と改称しました。1957年(昭和32)、現在の文教町に移転します。この間、4~5年間男子学生が学んでいた時期もありました。そして2004年(平成16)4月からは本格的に男女共学がスタートし、現在に至ります。



エンゼル(三島北高校蔵)
明治34年開校時の校舎の破風飾

《協力者》 順不同・敬称略
折井美耶子 勝又基 桜井祥行 関守敏 高村恵美 平井和子
安養院 岩波書店 柏書房 静岡県男女共同参画センターあざれあ 静岡県立中央図書館
静岡県立三島北高等学校 清水町社会教育課 三島市古文書読習会 三島市広報広聴課
三島市男女共同参画係 みしま女性史サークル 三嶋大社 至文堂 沼津市明治史料館
龍溪書舎

《参考文献》
女性史研究入門(三省堂) 新版日本女性史(三一書房) 日本女性の歴史(角川選書) 近代女性史(現代書館) 中世に生きる女たち(岩波新書) ジェンダーから見た日本女性の歴史、日本民衆と女性の歴史(以上明石書店) 史料にみる日本女性のあゆみ、古代女性史への招待、文芸に見る日本女性の歴史(以上吉川弘文館) 「モノと女」の戦後史(平凡社) 静岡の女性(静岡県男女共同参画センターあざれあ編) しずおかの貴重書(静岡県立中央図書館) 新訂 魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝(岩波文庫) フロイスの日本覚書(中公新書) 祈り・祀り・鎮メル(静岡県教育委員会)

※ 本企画展は、当館学芸員・渡邊美幸及び同・政木愛子の協力を得て、学芸員・鈴木隆幸が担当しました。
※ 会期中、一部展示替えがあります。
※ 本稿の編集にあたっては、女性史年表を渡邊美幸及び政木愛子が執筆担当し、その他の部分については鈴木隆幸が執筆担当しました。

三島市郷土資料館

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
発行日 平成19年3月18日
TEL055-971-8228 FAX055-981-3730
<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>